

---

# 白より白き秘密基地

永月ほたる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白より白き秘密基地

### 【Zマーク】

Z8551A

### 【作者名】

永月ほたる

### 【あらすじ】

中学校生活最後の夏休み、見事に補習の餌食となつた亮平。自分とは対照的な幼馴染みの瑞希。その距離を埋めるのは『成績』ではなくて…。

## (前書き)

この小説は共同企画小説「秘密基地」の参加作品です。  
他の先生がたの作品は「秘密基地小説」で検索することができ  
るので、是非ご覧下さい。

追伸、ちょっとと考えた末にジャンルをファンタジーへ切り替えまし  
た。

今後の創作のためにも、それが自分の今の答えです。  
むしろそれだけ力を込めたと言つべきか…とにかく意見、この感想  
下さると嬉しいです。

ミーン・ミンミンミン・ジジジ・ジジ……。

甲高い音は、それだけで感覚を鋭化する。

今年は例年にはない猛暑で、すでに身体はオーバーヒート気味。  
コミケ会場、もとい国際展示場では驚異の40℃超え。  
今も校庭に目をやると、見えない影が揺ら揺らと地表面を這いつくばつてそうだ。

キーンローン……カーンローン……。

機械的な音が告げる、昼休みの到来。

本当なら購買のレアアイテム『めるんジャムロール』を食べたい気分だけど。

こんな真夏の真っ只中に外へ出よう命知らずなどいふわけがない。  
毎度のようにオレを起こしてくれる鐘音だつて、季節さえ変わればもつと心地よいはずなのだが。

「はあ……」

最初に『溜め息の数だけ幸せが逃げていく』とか言つたヤツは誰だろ？

もともとネガティブな人間だと自負しているが、真夏日の今日はなあおさらだ。

お尻が席から離れるのを拒み、片肘は机上で不動のポーズ。  
そんなオレとは対照的に、聞き慣れた足音が昇降口からやって来る。

たたた、たたた……たたたた、たん……。

音に合わせて、顎を支えていない方の手で木製の学習机を軽く叩く。

おおかた予想済みの、一段抜かしで駆け上がる足音・リズム。

がらがら　がら……。

足音が止むと同時に教室の戸をソワソワと開けるヤリロングのトースウェア。

いつも通り、キヨロキヨロと小動物みたいに左右に首を振っている。

「おい、瑞希！」

オレは相変わらず片手を顎に当てたまま『おいでおいで』の素振りを見せた。

「あつ、いたいた……つようくうん！」

この時間にやつて来るのは悪友の雅貴か、幼馴染みの瑞希くらい。とはいえ雅貴が毎日のように時間厳守で登場するはずがない。

瑞希は何人かに挨拶しながらテクテクと等速直線運動。

「やつほ、今日はどうだつた？」

オレの前の席から椅子を押借し、小さなテーブルをはさんみながら対面。

「はあ……『だるい』の一言に及ぶるな」

「もう、元気ないよ？ たかが補習くらい、へつけいやうだよー！」

そう言って瑞希は元気のない子供をあやすように下からオレを覗き込んだ。

瑞希とは、夫婦のように弁当をつつきながら、最近の日課になつている。

とはいっても内容は部活のこと、テレビのこと、補習のことなど、ごく日常的なものばかり。

んでもつて、今日は進路……まあ高校受験といつてんだな。

「それで、瑞希はどうなんだ？」

肘をついたまま両手を頬の下で組み、尋問のポーズをとる。これでカツ丼があればベタな刑事ドラマだ。

「つよづくんなは？」

「オレへえつとまあ公立でいいかなあ……やつは瑞希」やどりな  
んだよ？」

ちょっと前のめりになつて、瑞希の顔を覗き込むよつた体勢で聞き返す。

「え……私は……」

眉間に少しばかり戸惑いの意を込めて田を逸うす瑞希。

「私は……隣町の私立に……」

「そつか、じやあ近くだな」

「うん……そだね」

口数こそ変わらないが、いつもとは違つて少しばかり素つ氣無い返事だった。

昨日は、ご飯粒を顎につけながらムシャムシャと毎飯をつついでたのに。

「じつしたんだよ、オマエらじくはないな……」

幼馴染みの特権で、瑞希の頭をサワサワと撫でるが。

「え……あ、それより、お弁当食べよつよ?」

瑞希はそつ言つて、何か自分の気持ちを別へ向けるといつとある。

結局、そのまま脛休みは殆ど無言で終わつてしまい、瑞希はラケット手に再びコートへ戻つていつた。

無論、いつまでもなく“頭ナデナデ”など微塵の効果もなかつた。

その日の帰り道。

いつもの商店街を颶爽と自転車で駆ける先に、同じ学校の制服が見えた。

望遠モードで焦点を絞ると、テニスラケットを背負つたセミロング。

本屋から出てきたソレにオレは声をかける。

「よつ、瑞希！」

瑞希は一瞬ビクッとしたよつこも見えたが、そのままオレの方へ寄つてくる。

いつも思ひのだが、まるで祖母の飼い猫みたいな習性。

たたた、たた……。

その足音は、トーンの違つもの、夏休みのソレと同じリズムで近づいてくる。

「りょうくん、おつかれさん」

ひょっこり何気なく自然に肩を並べる。

「ふう……一日を国語と社会で拘束されるのは、ホントかつたりいな」

まさしく『身から出た鎧』といつ言葉がお似合いの立場なのは分かっているのだが。

勉強、しかも苦手科目だけで夏休みの貴重な1日が消滅するのは骨肉を削がれる思いだ。

そんな雑談を交え、オレは夏休みの話を持ちかけた。

「……で、瑞希はさあ」

だが、瑞希はオレが言いたいことを先読みしたかのように切り返す。

「りょうくんはどうするの？」

「え、オレ？ オレは……」

早朝のガラス戸を透かす朝陽のような瑞希の視線。

とりあえず周りと楽しくやつていければいい、そんな楽観者に瑞希の言葉は続く。

「もつたいないよ、せっかく頑張つてるのに」

「いや、オレなんてそんな、大して頑張つてないって」

「つづん、りょうくん、最近頑張つてるよ！ 私には分かるもん！」

補習で机に拘束されている分、確かに勉強時間は増えている。

それに最近は瑞希にも勉強を教えてもらい、会話の機会だつて増えた。

しかし、今のオレって物凄く努力家に見えるのだろうか……補習対象なのに。

そんな脳天気に向かつて、瑞希はジーッと円らな瞳を向けていた。大きくて瑞々しい黒目に必要以上の涙を溜めて。

「ちょ……み、瑞希？」

訳も分からず、辛うじて名前を呼べるくらいに困惑。

それに呼応し、瑞希は何か意を決したようにゆっくりと口を開く。

「私ね、ホントはりょうくんと同じ高校に行きたいんだ……とつても」

昼休みとは矛盾した頓珍漢な発言に、オレはしばらくフリーズ。たぶん、瑞希は何か理由があつて隣町の私立を志望しているのだろう。

笑顔も自信もなく、ただ俯いたまま淡々と言葉を羅列する瑞希。そこには昼休みに弁当をつつく瑞希とは違う、別の瑞希がいた。今にも見えない不安に押し潰されそうな弱々しい表情を模つて。小さな頃、ソワソワしていて1人で口クに外も出歩けなかつた瑞希。臆病で寂しがり屋の瑞希、それはオレしか知らないもう1人の瑞希だつた。

それなのに、オレの口から出た言葉は。

「オマエ、さつきは私立だつて……？」

『言つた矢先に後悔』する典型的な言葉。

「ごめん、私はもう決まっちゃつてるの」

瑞希は静かに首を横に振る。

「そうか……じゃあカミセンが言つてた推薦入試つて」

「ごめんね、隠すつもりじゃなかつたんだけど」

「いや、そんなの気にしてないし、それに推薦つてのは実力が認め

られたつてことじやないか、もつと喜べよ

「うん、嬉しくない訳じやないんだ……でも、そしたら私の気持ち  
は認められないまま春になっちゃう」

何か足元に大事なものを落として困惑するような、瑞希の悲しげな  
笑顔。

それは、もうこの先ずっと会えないのではと、不安すら強き立て  
た。

確かにオレは受験も卒業も学園生活のイベント、ネタに過ぎないと  
思っていた。

だが今の瑞希の一言で『思い通りにならないこともある』のを心底  
痛感したのも事実。

そう、いつだつてオレは瑞希の言葉から、ホントに大事な何かを教  
えられてきた。

今まで嫌でも顔を合わせてきた瑞希。

オレの十数年に及ぶ人生は、コイツで満たされている。

それだけに、互いが離れるということに何の懐疑も覚悟も持てなか  
つた自分自信に腹が立つ。

「難しいな……」

何が難しいのかも分からず、ボソッと一声。

焼け石に水なのは分かつていたけど、何か言つてあげたかったのは  
間違いない。

翌朝もいつも通り。

8時に家を出て、右手にペットボトルを携えて自転車を走らせる。  
夏場は水分補給が欠かせないし、校門前には心臓破りの上り坂。

「おー亮平ー朝から」」苦労なこつた」

「『挨拶だな……学生とは辛いもんだーまつたく』

「ははー真面目にやつてれば辛くないけどな」

ドイツ代表のユーフォームを纏つた俊弘こそ早朝練習とは元気なものだ。

そして、その先には見覚えのある背格好がテクテクと歩いてくる。

「…………」

しかしその日、ホントに初めて、オレは瑞希の横を素通りした。今までなら、どんなに先からでも大声で呼び止めていた瑞希。自分の横を素通りした自転車がオレだと、この時は分かるだろ。今朝はオレの背中をどう見てているのか？

結局その日は予想こせていたもの、やはり瑞希は来なかつた。練習の都合ではない」とくらいい、容易に察しがつく。

今まででは鬱陶しいくらいに寄つてきてしまふは色々な話をした瑞希。

結局その日は一度もアイツと言葉を交わすことなく帰路についた。

…………私、りょうくんと同じ高校に行きたいの。

…………私、いつもりょうくんのこと見てたから…………。  
でも…………決まっちゃつてるコトだから…………。

…………私の気持ちは認められなかつたつてコトだね…………。

昨日の言葉が、手に取るようになつて脳裏を駆け巡る。

いつも一緒に瑞希との別れを象徴する悲しい声。

2人がいかに楽しく幸せだったかを知るには十分すぎる代償。

1つ1つの言葉にアイツの屈託ない笑顔を痛いまでに感じて止まない。

その日の放課後、オレは疲れ知らずの俊弘に手を振りながら逃げる

ように正門を後にした。

そして数日が経ち……補習のない日曜日。

「暇だ……」

暇なら勉強しようと別のオレが言つているが、あいにくの日曜日。コンビニでも行つて気分転換するか……と、悪魔の囁きに身を委ねる。

そつとして善は急げと靴紐を締めて家を出る始末。

しかし外は相変わらず真夏の日差し。  
ジリジリと肌の焼かれる音までしそうだ。

「だりい」

自分から勇んで出たくせに1RでKO負け。

真っ白に燃え尽きるどころか、真っ黒焦げに返り討ちされた感じ。  
コンビニ前の信号までは約10分かかる。

しかし、ふと家から数分歩いたところに小さな森があるのを思い出した。

「そういえば……」

あの森は昔よく瑞希と2人で遊んだ場所だつた。

近くの「」置き場からガラクタを拾つては持ち出しつ。

秘密基地つて言葉が流行つてたのも、あの頃だつたと思ひつ。

「日陰もあるし、ちょっとくら寄つてくか」

コンビニへ赴く必然性がなかつたので、オレは懐かしの基地訪問へと予定を変更した。

がさ、がさ……。

れれあ……がれ。

もはや獣道と化した遊歩道に人の手を加えた形跡は見られなかつた。それでもオレはズンズンと足を森の奥部へ運ぶ。すでに20分弱経つているだろつか？

……と、そのとき。

「つようくん？」

草むらに由い影が走つたかと思つと、不意に目の前に1人の少女が現れた。

見るに小学校中学年ほどの背格好、顔つきは7～8歳程度の不思議な雰囲気の女の子。

「ねえ……りょうくん？」

そういえば『りょうくん』も瑞希とオレの共通言語だつたな。

昔から周囲には名前で呼ばれる中、瑞希だけがそう呼んでいた。

そのせいか、一瞬オレは少女の面影に瑞希を投影してしまつ。なおも白いワンピースを纏つた少女は、屈託のない笑みで近づいてくる。

木々の合間から射す強い輝線は、ゼミロングに艶と色気を。  
差し出された右手には、黄緑色のリングがキラリ。  
だが、汗ばんだ少女の手の平こそが最も高い反射率を誇っていた。  
ちょうど昨日の補習で齧つた『光と音』を思い出す。

一見フリーズ氣味のオレに少女はさらに近寄った。

そして。

「早く行こ！」

ニコッと笑つて少女はギュッとオレの手を握つた。  
オレには何がどうなつているのかサッパリ分からぬのですが。  
ただ一つ言えるのは、オレは第三者の目に不審者として見える状況  
であること。

とはいへ、少女はオレのことを知つてゐるみたいだし。  
もともと時間を持て余してゐることもある。

懐かしい秘密基地に立ち寄つたのも何かの縁で。

ちょっとくらいなら相手してやつてもいいか。

というわけで、オレは少女に同道することにした。

少女は汗ばむ額も気にせず、鼻歌で行進曲を奏で続ける。  
互いの身長は月とスッポンで、歩く速さも桁外れに違う。  
彼女がトテテテ……と小走りしても、オレは悠々と歩くだけで十分  
な程だつた。

そうして不思議な世界をオレたちは闊歩する。

暗い木々のカーペットを抜けて。

蘚苔類のカーペットを越えて。

そして、ようやく田の前に2人“だけ”の空間が広がる。

そこは今でもオレと瑞希の秘密基地“そのもの”だった。

通学路のちょっと外れにある、じんまりとした森。  
見かけは小さいのだが、これがまた意外に深くて。

そんな暗くて深い雑木林の奥にある、小さく開けた虫眼鏡の焦点の  
ような場所。

中央には小さな泉が湧いていて、そこからチヨロチヨロと小川も流れ  
ていた。

毎日のように遊んだ日々が脳裏にフラッシュバックする。  
そして、隣にちょこんと待る少女をオレはいつしか瑞希と思い込んでいた。

「そうそう、瑞希はいつもドジである」  
「そんなことないよ、だって……」

「でもさ、いつも川に行つたらパンツまで濡らして戻ってきたじや  
ん？」

「そ、そんなコト……恥かしいよ……」

「そのたびにウチで着替えてたんだからわあ……」

「その話、もう止めようよ~」

真っ赤になつてポカポカとオレの胸板をたたく小さな瑞希、その仕草は今も全く変わらない。

『よしよし』と一方向に整つた旋毛を軽く撫で上げ、自尻から頬にかけて丁寧に擦つてやる。

昔はそりやつてウルウルした瑞希をあやしたつけ。

刻の歩みを躊躇てしまつて、やうな不思議な空間。  
でも気分はホントに懐かしい……いや、気持ちいことばかりだ  
うか？

「変わつてないな」

「うん、いつだつて、ふたりだけのトロロだよ？」

田を緑め、ちよこと遠くに焦点を移しながら思い出のすべてを瞼の  
裏に投射する。

その横で、少女は爪先に引っかかった茶褐色のガラクタにちゃんと  
手を伸ばした。

「あは……、つょ、くん、コレなーんだ？」

遺跡調査でもしたのか、手を真っ黒にして戦利品をかざす。  
発掘直後の土器みたいなものを歴史の苦手なオレに突きつけられて  
も困るけど。

それでも無邪氣な少女の眼差しに誘われて、その形骸を覗き込む。

「それは……何だかお椀みたいだな？」

「そうそう、これね……つょ、くんのだよー！」

「はあ？ 何で分かるんだよ？」

そう言い返すと、少女は何だか紅潮してモジモジした。  
何か生理的ではなく心的にこみ上げるものを感じているようだな、そ  
の仕草が可愛い。

そして、少女が会話を再開をせる。

「だつて……おちやわんつて、これ一つだけなんだよ？」

「ん？ オマエの分はどうしたんだよ？」

「え、だから……その……つと……」

少しだけ言葉を口籠もつてから。

「ふたりで一つなんだよおつ」

開き直つたよつて一カツと、頬の熱氣を残したまま笑いかける。  
そうか、それで……これを持って来たのは瑞希ではないから、オレ  
のなのか。

何となくではあるが、堰を切つたように2人の時間が溢れ出る。  
「この茶碗、いつもオマエが洗つてくれたんだよな？」

そつ、瑞希はオレの茶碗を泉で洗つていたんだ。  
いつもお約束のようにビショビショになりながら。

膝は真つ黒、スカートを透かしてクッキリと浮かぶクマの絵柄。  
向日葵のような夏の日差しにも劣らぬ眩しい笑顔。

楽し“かつた”な……ホント。

あれから、どれくらい経つただろう？

オレたちは時間を忘れて言葉を交わした。

ママ、コトだけではない。

夏はカブトムシやクワガタ、他にもたくさん虫を捕つた。  
動き回るにはあまりに暑くて、オレは泉の中へ飛び込んだ日もある。

「そーいえば、瑞希は水浴びしなかつたよな？」

「うえ……そうだつたっけ？」

「ああ、オレの記憶が間違つてなければオマエ、プールが嫌いだつ  
たはずだ」

「ふええ、だつて、みずき……お胸がちいさこから、プールきりこ

だよお「

襟元に両手を当て、耳たぶを真っ赤にして俯く少女。  
大小の基準すら知らないだろと、聞こえない声が聞こえてきそうだ。  
なんか妙にリアルで、言い出したオレも顔の火照りを隠せない。  
その他にも沢山の思い出がこみ上げてくる。

ある日、要不然なつた布団を口にくへ持つてきたつけ。

「じょうくへん……コレ、ビツするのぉ?」

「いーから、いーかり……」

途中で粗大ゴミ置き場の炊飯器に目が止まると。

「ふえ……じょうくへん、おもいよう」

「がんばれ! みずき、もつちゅうとだぞ!」

ちょっととした冒険気分が互いの心を適度に刺激し、何もかもが楽しく感じた夏の日。

何も入つていらない炊飯器を使い、まるで夫婦のようにママ、コトを演じる。

眠くなれば綺麗に畳んだ布団を広げ、手を繋いで大の字。瑞希は本当に寝てたのか分からぬけど、何かムニャムニャ言つたな……。

ああ……じとなにも楽しい時間はホントに久しぶりだ。

いつもは授業と部活の波状攻撃で1日が終わり、そのままダラッとする生活。

夏休みになつて補習が始まり、確かに瑞希との時間が増えた。

しかし。

「悪い『ト』したな…… アイツ」「元

いつも一緒に駆けすり回った瑞希。  
どんなことも愚痴らず付きまとつて、それでいてオレにはちょっと  
ばかり甘えん坊の瑞希。

「つょうくん、わるこコトしたの？」

少女はオレの独り言に聞にかける。  
じつと見つめる澄んだ瞳は、つい先日まで言葉を交わしていたア  
イツのそれだった。

「ああ、悪いことしちまつた」

「あやまつてもダメなの？」

「うへん……でも、消すことなどできないからな」  
少女をひょいと持ち上げて、膝の上に座らせる。  
少しばかりママゴトして首を左右している。

「ふへん……みずき、むずかしくてわからないけど……」

そして、振り向いた少女の顔が視界を埋める。  
薄桃色の、見ただけで柔らかいと分かつてしまつ小さなそれ。  
パクパクする奥から言葉が聞こえた。

「つょうくんだつたら……みずき、だいじょ、ひふー。」

「え……？」

思わずその口唇に脳が溶かされる。

「オレは、みずきだつて、つょうくんためーわくかけっぱなし

「あは、みずきだつて、つょうくんためーわくかけっぱなし」

「そんなコトはないよ……オレは……」

いつまでも居て欲しい……。

大好きな瑞希に、ずっと……。

……満天の星空。

気がつけばオレは昔懐かしい平べったい布団の上に寝つ転がっていた。

なぜココで寝ているのか、イマイチ事態を把握できないけれど。

この状況は、不思議な世界ではなく現実にオレが秘密基地へ足を運んだコトを示唆している。

意識の回復に伴い、ちょっとぴり火照った右手に確かな温もりが走る。隣には等身大の瑞希が……って、みずき……がいる？

ということは、瑞希もココに足を運んでいたことになるではないか。そもそも一体、さっきまでいた少女は何者だったんだろう？  
でも確かに『みずき』という一人称を使っていたような……。

「つよ……くん？」

そつこえば、あの子も同じ呼び方をしてたつけ。

「『つよ「つくん』か……」

寝起きの瑞希は、今になつて初めて互いが繋がつていてることに気づく。

「え、あ……りょ、りょうくん、『つくん』？」

「あ……いや、これはその、まあ……あれで……」

よつほどオレの慌てぶりが滑稽だつたのか、クスッともう一方の手で鼻の頭を擦る瑞希。

そのまま彼女は静かに首を左右した。

「つうん……いいの、もう少し、このままでいさせて……」

砂を払おうとしたが、そのまま繋いだ手を離さない瑞希。

その瞳は吸い込まれるように透明で、かつ強い光を帯びた黒曜石のようだった。

てくてくてく……。

一歩一歩がスローモーション。

その最中もオレは必死に弁明をした。

氣だるかつたから気晴らしに出かけたこと。

そこで森の広場を思い出したこと。

そして、不思議な少女に出会つたこと。

赤面しつつ話を続けるオレに、瑞希は「コーコー」と相槌を打つ。

実は瑞希も出かけがてらに森の前を通つたらしい。

それ以降は頭がボヘッとして覚えていないようだつたけど。

きつとオレは瑞希の意識に引き寄せられて、『口へ来たのだ。

あの少女は瑞希の中にいる“本当に”オレだけの瑞希に違いない。一時は赤の他人になりかけたけど、ニッコリと横からオレの顔を覗き込む瑞希。

『鬱陶しい』とは裏腹に、オレは思つ。

やつぱり瑞希と一緒に過ぐす時間は止められない。

ポツ ポツ…… ポポツ……。

2人を見守るように、ホワホワ～と何か小さな燐光が舞う。

「あ……」

お互い、目に同じものが留まつた。

周囲を見渡せば、発光体は数匹に留まらない。

“誰か”に見られているような恥ずかしさを感じるほどの優しい燈り火。

慌てて照れ隠しに手をポケットに入れるが、瑞希のまで入つて、ちよつとデキッとする。

その刹那、互いの視線が絡みつき、空氣の質感が変わった。

「あ、あのや……瑞希？」

「え？」

「卒業しても、一緒にだからな？」

「つよ、つくと……？」

「進路なんてみんな違うし……それが当たり前だと思つたけどさあ」

大好きな瑞希。

今こそ自分の想いを。

瑞希への想いは、もう喉元まで込み上げている。

グッと腹に力を込め、真っ直ぐに瑞希の目を見つめた。

「受験」ときで泣かないでくれ！

瑞希が泣くと、オレも辛いんだ……。

オレは、これからも一緒にいたい！

「だから……オレ、頑張るから」

離れないように頑張るから……！

「もし離れても、四六時中『会いたい』って思わせてやるから。」

当然、この気持ちは永久保証だ。

「つよつ……つく……つん」

不思議な高揚感……自分に酔い痴れているのだ。つ。  
はつきりと言葉として認識できた語句は僅か。

そんなオレの胸元で、瑞希の頬からポタポタと垂れる大きな雫。  
月明かりに光るそれは、虫の飛び交う湿地帯をより幻想的に彩る。  
小さな手にぐつと力が籠り、シャツがキツと唸るやいなや嗚咽が響く。

「私も……」

「私も、つようくんと一緒にいたい！」

「離れても……私のこと、捕まえに来てくれる？」

「愚問だ、絶対に……今さら離すもんか！」

そう言つて無理やりに瑞希の頭を肩に抱き寄せ、大事な宝物のよつに優しく丁寧に撫で下ろす。

「あ……ぐすつ……」

そう、瑞希はオレのかけがえのない宝物。

「ごめんな……辛い思いさせちまつて」

「りょうくん……」

「今やら謝つても、心の亀裂は消せないけど……っく」

小さくて平べつた手の平が、すっとオレの腰に当たる。それは強い抱擁力で肩甲骨へと擦り上がってゆく。

「オレは、オマエに酷いことばかりして……」

「あ……は、私だつて、りょうくんに迷惑かけっぱなしで……」

「ばか……そんなコトはないさ」

もう一度、今一度、自分の想い全てを、小刻みに震える瑞希の柔らかい耳に呴いた。

「これからも一緒にいてくれ、瑞希……」

「あ……つぐ……うう」

華奢な身体の振幅が増す。

泣きじやくつて、言葉にならない言葉しか聞えない。そんな瑞希を精いっぱい両腕で包み、抱き込む。

見上げる空。

日中の真夏日は去り、青碧の中で煌々と煌めく華麗な月。手を伸ばせばすぐにでも掴めそうな大円。

もちろん、掴めるなんて大嘘だけだ。

だが、この日の月はそれくらいに大きく、最高といつ言葉すら無力なくらいに綺麗だった。

それは、瑞希が隣にいたから。

いや、瑞希と一緒に見る月はいつだって何よりも、正確には瑞希の  
次に綺麗で、愛しい。

どれだけ歩いたことか。  
もうすぐ出口。

意識こそしていけど、手に優しい力が感じ取れる。  
それは幼馴染みの絆で引き合っているモノではない。

そう……ギュッと握り、弓を引いたものは。

心と心。

想いと想い。

そして……口脣と口脣。

翌週。

オレは瑞希と一緒にテ二部の飲み物を買いに正門を出た。

「おつーお二人さん、今日も熱いねえ……」

「『暑い』の言い間違いじゃねえのか?」

「あはは、どっちもだよ」

相変わらず俊弘は汗だくのままピッチを駆けている。

「つよくんも行つてきなよ、買い物は私だけで大丈夫だから」

「何言つてんだよ、オレは部活をしに来たわけじゃねえからな」

「あは……なんか、変わったね、りょうくん」

もつすぐ太陽が屋上に到着する。

熱さの止む気配など皆無。

「なんか……こんな関係になるのって不思議だな」

「うん、でも私は嬉しいな？」

あはは……と、瑞希が俯いて頬を張る。

「オレは、今でも考えるんだ……ほんとにオレなんかいいのかつて」

そんなオレに瑞希が、すうっと肩を寄りかけ手を重ねる。

「私は……りょうくんが好き、だ、い好き！」

「暑さでやられたか？」

ツンと額に指を立てる。

「ふむうー！ そうやって霧囲気を壊すトコ、良くないなあ

「わ～つた、謝るよ」

どちらからともなく手を取り合つ。そこにはポンと白黒模様の入ったボールがやつて来て、霧囲気をぶち壊す。

「おう、わりい……取ってくれ！」

「しゃあないなあ……」

身体の軸を傾け、右足に重心を置いたまま腰の反動で、左足の爪先から土踏まずのラインで回転をかける。

ぱひあ……。

「ナイシュー！ 地区大会なりドンペシャだぜ」

俊弘は今でもオレを呼んでいる。

「戻つて来いよ、相棒！」

だが、残念ながらオレには別の相棒ができてしまった。

一方向に整った旋毛を軽く撫で上げ、自尻から頬にかけて丁寧に擦つてやる。

「行こうか？」

「うんっ！」

差し出した手に自分の『幸せ』が応えてくれる、

それがまた幸せで浮かれてしまつ、そんな夏の昼下がりは……  
暑かった。

(後書き)

\* カミセン・担任の上岡先生みたい。  
テニ部・テニス部の略。

長々とお付き合いくださり感無量です。

書いてる本人が恥ずかしくなる台詞を厳選したのですが、何度も読み返してると脳味噌が麻痺してきますね。w

そこまで読み返すほどのものではありませんので。  
ところで、これは恋愛小説でいいのでしょうか？笑  
では、またお会いしましょう、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8551a/>

---

白より白き秘密基地

2011年1月25日02時39分発行